

「ふだん」攷

—不斷から普段そしてふだん—

萩原義雄

はじめに

いま「ふだん」を漢字で表記する場合、どのような漢字を書くであろうか。ちなみに『新潮国語辞典』を繙くに次の如くである。

フダン〔不断・普段・普斷〕（普段・普断は後世の宛字）

一（名）①絶え間なくいつまでも続くこと。

「聖天（ショウテン）」の法を不斷に行なひ〔宇津保・菊の宴〕。

「御修法不斷にせさせ給ふ」〔源・若菜上〕

②公（オオヤケ）でないこと。

③麿（ケ）。↑↓晴れ「不斷着の裾廻し」〔浮世風呂二下〕

④決断力の鈍いこと。にえきらないこと。「優柔不斷」

二（副）常に。へいぜい。

「不斷、道具が取り散いてある」「狂・子盗人」。〔不斷の身だしなみ〕〔織留五〕

『ふだん』攷（萩原）

フダンイシャ 「不斷医者」 ①かかりつけの医者。

②常にそばにいて医療よりも話し相手をするような医者。

「**不斷医者**」は次の間に鍋を仕懸け」「胸算用」二

フダンギ 「不斷着」 家にいるときや身なりをかまわないと着る衣服。↑↓晴れ着 「一代男」

フダンギョウ 「不斷経」 フダンギヤウ ①毎日読む経。

②死者の幸福・追善のために、一定の期間に、昼夜間断なく法華経（ホケキヨウ）・最勝王経・大般若経（ダイハンニヤキヨウ）などを読経（ドキヨウ）すること。「源・総角」「栄花・疑」

フダンざくら 「不斷桜」 「ひがんざくら」「さとざくら」の一品種。初春から四季に絶えず咲く。四季桜
〔桜品・不断桜〕

フダンソウ 「不斷草・恭菜」 フダンサウ アカザ科の二年草。南ヨーロッパ原産。高さ一メートル余。葉は長卵形。初夏、黄緑色の小花を穂状につける。四季つねに食用となる。ふだんな。とうちさ。

フダンのコウ 「不斷の香」 一カウ 絶えずたく香。

「壘破れでは霧不斷の香を焼き」 「平家・灌頂・大原御幸」

フダンのサンマイドウ 「不斷の三昧堂」 一ダウ 間断なく念佛三昧を修する堂。「源・浮舟」

フダンのネンブツ 「不斷の念佛」 日数を決めて昼夜絶え間なく念佛をとなえること。「源・薄雲」

フダンリン 「不斷輪」「仏」 祈雨、祈晴などの際に、僧が順番に呪文（ジュモン）を絶えず唱えて祈禱（キトウ）すること。

「不斷」の漢字が正しく、「普段」や「普斷」の漢字が後世の宛字であることは、このように辞書でも繙かねば気がつかなくなつてゐる用字ではなかろうか。そこで、現代一般に広く引用されている岩波の『広辞苑』で同じく「ふだん」を確認してみると、見出し漢字は「不斷」しか記載していない。「普段」そして「普斷」の宛字は辞書の世界ではまだ認知されていないことになる。そして『新潮国語辞典』の「後世の宛字」ということばこれ 자체はつきりしないので、さらに、小学館『古語大辞典』に及ぶと、何でも見出し漢字は「不斷」で、まず名詞として「絶え間ないこと。間断ないこと。特に読經の仕方についていう」とが多い。

「正月一日（むつきついたち）御修法不斷にせさせ給ふ」〔源氏・若菜上〕

「初夜（そや）より始めて、法華經を不斷に読ませ給ふ」〔源氏・総角〕

副詞 いつも。常々。平常。

「ふやいや、ふだん掃除を召さると見えて、綺麗なよな」〔虎明本狂言・萩大名〕

「フダン [Fudan] タエズ。すなわちイツモ」〔日葡辞書〕

を記載している。

今回現代人に馴染みの薄くなつてゐるが、辞書の見出し漢字としては依然として譲ることのない「不断」の使用状況と表記について考察し、「ふだん」の宛字使用の実体もみてみようと考えたしだいである。

一 古典語としての「ふだん」

1 平安時代の「ふだん」

平安時代の「ふだん」は上記の辞典類でも明らかのように名詞として「絶え間ないこと。間断ないこと。特に読経の仕方についていうことが多い」と言われるようすに読経の場面に集約されて使われる限られたことばであったようである。

『三宝繪詞』（勉誠社文庫刊東寺觀智院旧蔵『三宝繪詞』影印本参照）^{注1}

まず、源為憲の書いた和文『三宝繪詞』に次の三例が見出せ、形容動詞の連用形（副詞説もある）で「絶え間なく」の意と、複合名詞「不斷念佛」を見ることができる。

○十一日ノ暁ヨリ十七日ノ夜ニイタルマテ 不斷二 令行也

○ヒエノ山ノ 不斷念佛

○比叡 不斷念佛

〔下六二一オ①地〕

〔下三ウ⑦題〕

〔下六一ウ⑤題〕

また、数々の王朝文学作品に及ぶのだが全般を江戸時代の『雅言集覽』の「ふだん」の項目に記載されている用例を便宜的に掲載しておくことにする。これでは、『源氏物語』七例のうち四例、『宇津保物語』六例のうち二例、『狭衣物語』一例のうち一例の三作品を記載している。

○御修法はいつとなく **不斷に** せらるれば

〔源氏物語・柏木九〕

○正月朔日よりみずほう **ふだんに** せさせたまふ

〔源氏物語・若菜上七二〕

○寺をこそ云々いかめしく作られて **ふだん** の三昧堂などいとたふとくおきてられたりとなん聞給ふる云々

〔源氏物語・浮舟九〕

○忠こそのあざりも大願をたてゝさうでんの法を **ふだんに** 行なひ云々 「宇津保物語・菊の宴下三五／六二六①」

〔宇津保物語・菊の宴下五三／九三四⑧〕

○山々寺々に **ふだん** のずほうおこなはせつ、

〔源氏物語・薄雲三六〕

○例の **ふだん** の御念佛にことづけてわたり給へり

〔源氏物語・浮舟九〕

○いかめしき寺たて給ひてともすればこもりつゝ **ふだん** の念佛などを行ひ給ふを

〔狭衣物語・中ノ一〔下一九一②〕〕

次に一作品中用例の多い『栄花物語』中における「ふだん」を見てみることにする。

『栄花物語』(「『栄花物語』本文と索引」高知大学人文学部国語史研究会編、武藏野書院刊参照)

ふたん

○又 **ふたん** の御読経ともなといひやるかたなし

〔八・一一〇⑯〕

○宮の御方の **ふたん** の御読経などのまへわたりするほともわたくしにものへまうて、

〔八・一一三⑧〕

○おほかたのそらのけしきのおかしきに **ふたん** の御読経のこゑこゑあはれまさり

〔八・一一五③〕

○法花経の **ふたん** の御読経とてさるへきなにくれの供奉など四五人ゐてよみひゝかせは

〔一八・一六④〕

○みやの御かたの **ふたん** の御読経のさにしのひておはしましけり

〔一九・五⑬〕

ふた

○寿命経の **ふた** のみと経などせさせたまふ

不斷

○**不斷** の御読経などおこなはせ給しるしありて

○ところの **不斷** の御読経すへてさるへき御こと御はてまでとをきてさせ給

○そのことはてゝやかて三日三夜 **不断** の御念佛山の御念佛のさまをうつしをこなはせ給

○このころはさるへき僧綱凡僧ともかはりてやかて **不断** の御念佛なり

ふたんに「不斷に」

○宮にはとのおはしましてよき日して大般若觀音經藥師經などの御読経おののおの **ふたんに** はしめさせ給

[一〇・一二⑩]

ふだんきやう 「不断経」

○わか御よのはしめより法花經の **ふたんきやう** をよませ給つゝ内東宮みやみやにみなこのことををなしくおこな

はせたまふ

○あるひはふたん經あるひはあさゆふにつとめさせたまふときの受領とも

[一五・一四⑧]

[一五・一四⑫]

○みなこのまねをしつゝにのうちにても **不断経** よませぬなし

[一五・一四⑯]

○六月斗に太奏（ウツマサ）に参りて御修法藥師經の **不断経** などよませ給

[五・一七⑳]

これを見ると、『栄花物語』における「ふだん」の漢字表記は四例、平仮名表記は六例（「ふた」のN音無表記も

[一一・一二⑬]

[一・一〇①]

[七・一七⑳]

[一六・三六⑰]

[三〇・一四⑦]

含む）となる。これに「ふだんに」の平仮名表記一例、そして「不斷経」の漢字表記二例と平仮名表記一例が加わる。また、同時代の藤原道長の日記『御堂関白記』^{注2}においても「不斷念佛」・「不斷讀經僧」・「不斷經」・「不斷御讀經」・「仁王經不斷」・「法華經不斷」などの記載表記が見えるのである。

2 院政時代の「ふだん」

「不断」と「ふだん」が使われ、後世類義語の意味となる「常住」の一例も見える。

『今昔物語集』（岩波古典文学大系を参照）

○七日七夜 **不断二** 札拝恭敬シテ、心ヲ至シテ此事ヲ祈ル。 [卷十一・二四・一〇五②地]

○ **不断二** 法花ノ懺法シ修シ、弥陀ノ念佛ヲ唱ヘテ、彼ノ靈ニ迴向シケリ [卷十六・三五・四九五⑧地]

ふだんかう 「不断香」

○ **不断香** ノ香、庵ノ内ニ満チ、馥キ事无限。

ふだんのねんぶつ 「不断念佛」

○亦、貞觀七年ト云フ年、常行堂ヲ起テ、**不断ノ念佛**ヲ修スル事七日七夜也。 [卷十一・二七・一一〇①地]

○亦、陽勝仙人、毎月ノ八日に必ズ本山ニ来テ **不断ノ念佛**ヲ聴聞シ、大師ノ遺跡ヲ礼ミ奉ル也

[卷二十一・三九・一二〇七⑫地]

○而ル間、陽勝仙人、**不断ノ念佛**ニ参ルニ、空ヲ飛テ渡ル間ダ、

○然レバ、今日ヨリ始メテ、**不断ノ念佛**ヲ修セムト思フ」ト。

[卷十五・三七・三九五⑥詞]

○僧都、此レヲ聞テ、喜ビテ貴ビテ、貴キ僧共ヲ請ジ集メテ、三箇日夜ノ間、**不断ノ念佛**三昧ヲ令修。

〔卷十五・三七・三九五⑦地〕

〔卷十九・一七・九七⑫地〕

- 西ノ雲林院ノ**不斷ノ念佛**ハ九月ノ中ノ十日ノ程ノ事ナレバ
じやうぢゅう「常住」

- 此比、仏ケ、鳩戸那城、拔提河ノ邊リ沙羅林ノ中ニ在シテ、**常住**仏性ノ教法ヲ説テ一切衆生ヲ利益シ給フ。

〔卷三・二七・二五〇⑪地〕

〔卷十六・一一・四四六⑥〕

- 『宇治拾遺物語』（岩波新日本古典文学大系を参照）

ふだんかう「不断香」

- 不斷香**「ふだんかう」の煙満（み）ちたり。

〔二七三清滝川聖事卷一三ノ一二・三四三⑪〕

3 鎌倉時代の「ふだん」

この時代の「ふだん」は読経という制約の場で生き続けている。しかし、それと同様に類義語の「平生（へいぜい）」や「常々（つねづね）」が広く使用されてもいる。

『平家物語』（岩波古典文学大系を参照）

- 三百余歳（さんびやくよさい）の法燈（ほうとう）を挑（かゝぐ）る人（ひと）もなく、**六時不断（ろくじふだん）**の香（かう）の煙（けぶり）もたえやしぬらん。

〔卷第二・山門滅亡一九六⑥〕

- 晝夜（ちうや）朝夕（あさゆふ）の御つとめ、**長時不断（ちやうじふだん）**の御念佛（ねんぶつ）、おこたる事（こと）なくて月日を送（をく）らせ給ひけり。

〔灌頂卷・四二八④〕

○「庵（いらか）やぶれては霧（きり）**不斷（ふだん）**」の香（かう）をたき、樞（とぼそ）おちては月常住（ぢやうぢう）の燈（ともしび）をかゝぐ」とも、かやうの所（ところ）をや申べき。〔灌頂卷・大原御幸四二〇②〕

『曾我物語』（岩波古典文学大系を参照）

○致使凡夫念即生（ちしばんぶねんそくしやう）、**不斷**煩惱得涅槃（ふだんばんのうとくねはん）^{注3}とて、終焉（しゆゑん）の時（とき）は、一さんいの心を變化（へんげ）して、

〔卷第十一・四二二〕〔⑤〕

無住の『沙石集』（慶長古活字版『沙石集』を参照）

『沙石集』では「ふだん」は一例も見えない。このことは「不斷」の「絶え間なく続く」意の用例が、この作品に描かれていないことと、「いつも」の心を表すことば「不斷」がまだ使用されていない事を物語っている。そして、「いつも」の意を表わすことばはすべて「平生（ヘイゼイ）」によつて表現使用されていることからも知られるのである。

4 室町時代の「ふだん」

古辞書の中でも『運歩色葉集』は、「不」で始まる熟語の先頭に位置排列していく「不断（フ）ダン」と見える。

他の印度本系の『節用集』の『文明本節用集』、『弘治一年本節用集』、『永祿五年本節用集』、『經亮本節用集』や『饅頭屋本節用集』、『易林本節用集』そして『塵芥』、七巻本『世俗字類抄』、十巻本『伊路波字類抄』、『初辭通韻』にも収載されているが、逆に『下学集』^{注4}や印度本系の『黒本本節用集』、『和漢通用集』、そして『天正本節用集』、『伊京集』、『明応五年版節用集』、二巻本『世俗字類抄』には未収載であることは注意しなければならない。この頃の「ふだん」は、読経の世界とは離れていて一般化され、今日の「ふだん」の使い方と同じように「いつも。常々。平常」（『日葡

『辞書』の意味で用いられていることに影響しているのかもしれない。つまり、本邦古辞書の収録にあたり原意と一般化の両様するこの「ふだん」を『下学集』を初めとする古辞書群は受入れる体勢でなかつたわけで、取捨選択することになつたのかもしれない。すなわち、室町時代のある時期に社会の言語状況に伴う新分野の勢いのある増補語彙の一として『運歩色葉集』以下の辞書は採録されたことになる。これをさらに裏付ける上で、漢籍及び禅籍抄物、狂言類そしてキリシタン資料で見てみることにする。

『論語抄』（坂詰力治編著「論語抄の国語学的研究」〔京都大学付属図書館蔵『論語抄』〕参照）

- 常侍ハ天子ノ御前ニ **不斷** 居ル官也
- 小人ハ榮利ニ競テ惡事ヲスル程ニ何トカアラウズラウト **不断** 褒ルマデチヤソ
- イツモノ心ハ **不断** 也

〔一・一〇ウ⑩〕

〔二・四七オ⑬〕

〔四・二七ウ②〕

この『論語抄』は清原家の講説に関わるものである。一二番目の例は「いつも」の意で、三番目は「いつも」と「不斷」とを同意であることを説いたものである。しかし、依然として「平生」が使われてもいて数では二十四例と圧倒していることも見逃せない。

『人天眼目抄』（抄物大系『人天眼目抄』中田祝夫編勉誠社刊参照）

- 七仏已前ヨリ血脉 **不断ニ** シテ至 今日ニ
（＊絶え間なく）「足利学校遺蹟図書館蔵本八一⑯」
- 此塔ノ光ハ不斷定眨「トキ」ニ照スゾ
（＊いつも）「足利学校遺蹟図書館蔵本一六五⑬」
- **不断** 声色墮隨墮尊貴墮
〔東京大学史料編纂所蔵本五・四五二⑦〕
- 今マ則無滅此 **不断** 声色墮ノ所 由立スル 也

川僧慧濟の講義の聞書である。最初の「不斷」の例と三四番目の書籍引用例は「絶え間なく」の意で、二番目が口語体で「いつも」の意である。

『虎明本狂言』（「大蔵流『虎明本狂言集』の研究」表現社刊参照）

○げこ（下戸）には又、よきちゃ（茶）をたてゝ、かやうのかつけい（活計）ふだん（不断）にあるべし、

○（太郎冠者）／是はたのふだ人の、不断もたれた鏡でござるほどに、形見にさせられひ

大名狂言類・すみぬり一七六⑯

○//初なりて、女の事を云出さすに、こゝもとにて、しる人になつて、ふだんはないた衆に、いとまごひせうか、いらぬもかなど、云て、下人と談合して、おんごくものじやなど、おもしろおかしう云なす事もあり、又女をうちにより入る事もあり、色々仕様有

大名狂言類・すみぬり一七七⑯

○（栗田口）／中々、しゆすのきやはん（脚半）をふ断仕てゐる程に、随分くろ（黒）ふ御ざる

大名狂言類・栗田口二二一六⑮

○//それはふだんたぶる

○（太郎冠者）／これもたの（頼）ふだ人の、ふだんよませらるゝをきゝまらしたゆへでござる、

大名狂言類・ぼゝうがしら二四六⑧

○（大名）／いやいや／ふだん（普段）さうじをめざるゝと見えて、きれいなよな 大名狂言類・はぎ大名二九八②

○（太郎冠者）／中々ふ断庭にかゝつておしやりまらする 大名狂言類・はぎ大名二九八③

○(太郎冠者)／ぶあくが事は、日比私もぞんじてござり、又たのふだ人もあれは

ふ断

心がけたものじや、

大名狂言類・ぶあく三一一④

○(毘沙門)／〈頭略〉神といはれ候はゝ、いかにもきれひなる、もり林にもすみはせで、あの市の中に

不斷

すん

で、わらんずはきもの(草鞋履物)にふみこへられ、たまたまおもひで(思出)せんとては、小舟にとりのり、
おきのかたへいで、かんじやうなますうけく(受食)ふて、きぬ(絹)のた(裁)ちはづれ、ぬの(布)、たち
はづれなどをきて、しゆじやう済度はなるまひぞとよ

聟類山伏類・ゑびす毘沙門三三一八⑨

○(聟)／それは誠にやす(易)い事でござる、私せがれの時は、には鳥にすひて、

不断

けあはせて見てぞんじた

聟類山伏類・鶏聟三三三三⑬

○(舅)／**ふだん**はわらび(蕨)の餅と申、延喜の御門のきこしめされて、官をなされ、おか太夫とも申したると
申が、いや(賤)しる物のやうにおほしめされうするが、らうゑい(朗詠)のし(詩)にもの(載)つたもので
御ざる

聟類山伏類・おか太夫三五一⑨

○／人をたはけにして、**ふだん**くふめしをしらぬといふ事があらふか、にくひやつめが』

聟類山伏類・おか太夫三五三⑯

○よひものがきた、なんぢがやうなるものこそ、**ふだん**まつて、それがしがやうなるものがゑじきにすれ、

鬼類小名類・鬼のま、子三〇⑪

○(太郎冠者)／**ふだん**(不斷)ふせり付てうたひ申たによつて、おき(起)てはうたれませぬ

鬼類小名類・ねごゑ一五〇⑤

○(夫)／尤もそれはさやうであつたれ共、**不断** そなつのねがひに、目がつぶれたらよからふ、

女狂言之類・かはかみ一九一⑪

○(夫)／(略) 太郎くわじやが、**ふだん** つかひにくれ共、ことは(言葉)やは(柔)らかに、匂ひなどして、身共にねんごろにいふてくる、程に、目をかけておつかやれといふた程にな、満足してとれ

女狂言之類・はなご二一六⑧

○(尼)／いやいや**不斷** 参る所で御ざる

出家座頭類・なきあま三二一六③

○(住持) 今日だんぎ(談義)をと(説)くと申たれば、き、たひと申程に、是へ身が所へ**不断** 参るびくに(比丘尼)を同道いたひてまいつた

出家座頭類・なきあま三二一六⑪

○(夫)／只今も申ことく、内々おもひよ(思寄)りて御ざるにより、**不断** 女にも申て御ざれば、一段よからふと申た程に、いま(今)とても別義御ざるまひ

出家座頭類・路れん三三六⑭

○(田舎者)／それは**ふだん** お前に参るに、何とやらあたま(頭)をはられさうでわるひ

出家座頭類・仏師三五四⑪

○(すつぱ)／それならは、**不斷** おが(拝)み やるのに、せい(背)たか(高)くは、あを(仰)のひておがむもわるからふず、

出家座頭類・仏師三五五⑫

○(菊一)／やんや、人のほむ(誉)るが道理で御ざる、私が**不斷**きひ(聞)てさへおもしろ(面白)うござる

出家座頭類・どぶかつちり四一九⑨

○(見付の者)／扱はおもひあつた、かみがた(上方)に、よひ(良)しる(知)人をもつたが、そくさいでいら

る、かしらぬと、**不斷** いはれたが、さてはそなたの事であらふ

- (ばくち打)／中々 **ふだん** (**不断**) み (見) まらするが、まことにいみやう (異名) をつけ (付) たもだうり (道理) でござる、

以上の二十五例を見るに、三様の表記となる。このうち漢字表記がなされているもの十例、混ぜ書き表記三例、平仮名表記十二例からなる。最初の一例は形容動詞ナリ活用の連用形、あと残りは副詞の「いつも」の意である。

『天草版伊曾保物語』(井上章編『天草版伊曾保物語』風間書房刊参照)

- 我は少しも志を撓めず、**不断** [fudan] 健氣にして居る」と言えば、(*いつも)

- 或る女人夫を持ったが、大上戸ぢやによつて、**不断常住** [fudan jogiu] 酒に酔い沈んで、偏に死人の如くであつた。(*いつも)

『二んてむつすん地』(日本古典全書『吉里支丹文學集』上参照)

いづれも一般化した用例である。

- きよきこ、ろをもつに／をひては、**ふだん** よろこばしかるべし

[二七八④三三ウ一四]

- なんぞ **ふだん** なんぢののぞみのまゝに心のよろこびをもたんとおもふや

[三四一一②六〇オ一]

じやうぢゆうふだん [常住不断]

- **じやうぢうふだん**、じゞこつこく、大きなる事にもわづかなる／事にも身をいとひ、なにたる事をものつこさ

ず、ばんじともにぬきすてゝ、はだかになれとのぞむ也

[三四九⑤六二一ウ一三]

- これすなはち眞のみなもと、さいじやうのせより、よる／ひるといふ事なく、**じやうぢうふだん** かゝやかせた

集狂言之類・じしやく一四⑤
萬集類・みめよし一二六②

まふ者也

〔三六〇⑦六七〇一二〕

『国字本どちりなきりしたん』（小島幸枝編「どちりなきりしたん総索引」風間書房刊参照）

○師 それハ **ふだん** の事なるべし

〔二六ウ⑨〕

キリストン資料における「ふだん」は世俗一般化した「いつも。常々。平常」の意で使用されている。原意の「絶え間なく続く」の意は『天草版平家物語』に一例だけ「ふだんかう「不斷香」」の用例を見るのみである。それと、「ふだん」に接続して「不斷常住」とか「常住不断」といった熟語も形成されていることも知られるのである。

5 江戸時代の「ふだん」

江戸時代も「不斷」の表記が行なわれていて、義音による意讀表記が出現するのはかなり時代が降つてからの様である。古辞書ではただ「不斷(フダン)」と文字表記されるだけで意味は知れない。その中にあって『せわ焼草』は同續詞（一つづきことば）の中に「不斷(ふだん)朝夕」「八八上⑥」という語を採録していく「いつも」の意に解することができるのである。それとは逆に俳諧辞書では相変らず「絶え間なく引続く」の意で収録されていて、室町期の新しい意味を有することばの登録採用を実施した古辞書登録とは異なる原意を重んじた形式で採録しているのである。

『藻塩草』（大阪俳文研究会編『藻塩草』和泉書院刊参照）

○煙をだにもたえじと **〔不斷〕儀也**

〔卷一天象・煙一六ウ⑦〕

○いたづらに烟たつところあさまふじ「古今序にたゞとあるは **〔不斷〕**の儀也不立之儀不可」

〔卷一天象・煙一六ウ④〕

『ふだん』攷（萩原）

○時ぞともなく **〔不斷〕** の儀也いつともなきこゝろ也

○うちはへ **〔打たへて也 不断〕** の儀也綸の儀也

〔二八四下卷二〇詞部・一二ウ⑤〕

俳諧類船集

○**不断**^(フダク) 富士の雪 香 出來合飯 六時 灯明

讀出の課程をこたりなきこそ少人のわさにたのもしけれ。ふだんだるまよるもひるも頭巾ちやうとかぶつたと云。まらうとあれハ不断のかけ物をかけかへてもてなせり。不断まいらぬたゝきの与次郎としやべるなり

〔フ五・四六ウ〕

次に仮名草子を見るに、西鶴の「ふだん」はすべて漢字で「不断」とし、「不断——」と複合した語彙が散見する。また、同義語「常住」や同義の漢語が連結して「常住不断」を用いたりもする。意味はすべて「いつも」である。以下に示す。

井原西鶴（「西鶴全集」明治書院刊を参照）

ふだん「不断」

○**不断**^(ふだん) 衣装（いしゃう）はさのみ色を好まず、肌付（はだつき）は白（しろ）むくに黒（くろ）き

ひつかへしの重（かさ）ね小袖（こそで）、外（ほか）の芝居子（しばいこ）のかくはなるまじき事ぞかし。

〔男色大鑑卷七・一七三④〕

○唐土（もうこし）、**不断**^(ふだん) の知恵（ちゑ）を出して、「焼（たか）されしお風呂（ふろ）がよい」と申。

〔諸艶大鑑卷六・一五一⑤〕

〔卷二時節・二オ⑩〕

○古代（こだい）、石川（せきしう）の高角（たかつの）山に、浮（うき）世の月を見果（はて）し人丸塚（づか）の程ちかく、松年（まつね）ふりて **不斷（ふだん）** 閣（やみ）なる所有。

〔新可笑記卷四・一二七¹⁵〕
○今程は独暮（ひとりくら）せしが、内に猫（ねこ）もなく、東隣（ひがしどなり）は **不斷（ふだん）** 留守（るす）、にし隣（どなり）は七十あまりの姥（ばび）、然（しか）も耳（みゝ）遠（とを）し。

ふだんいしや「**不斷医者**」（かかりつけの医者）

○**不斷医者（ふだんいしや）**は次の間に鍋（なべ）を仕かけ、はやめ薬の用意（ようい）。

○**不斷（ふだん）** いしや 持脈（ぢみやく）を取、

○書院（しょいん）には御心やすき出（いで）入の者・**不斷醫者（ふだんいしや）**・樂出家（らくしゆつけ）まじりに、横手（よこで）を打（うち）、慟（どよみ）をつくつて笑（わら）ふ。〔男色大鑑卷四・一四八¹²〕

ふだんぎ「**不斷着**」

○美食（びしょく）・淫乱（るんらん）・絹（きぬ）物を **不斷着（ふだんぎ）**

〔日本永代藏卷三・七四¹⁷〕
○**不斷着（ふだんぎ）**の姿（すがた）を恥（はぢ）らい、灯（ともしび）をそむき、闇（くら）がりより手（て）を取（とり）かはし、四、五日の首尾（しゆび）をかたれば、

〔諸艶大鑑卷二・九〇¹¹〕

ふだんざしき「**不斷座敷**」

○**不斷座敷（ふだんざしき）**をはなれ、松（まつ）・柏（かしは）の年（とし）ふりて、深山（みやま）のごと

くなる奥（おく）に、一間（けん）四面の閑居（かんきよ）をこしらへ、

〔西鶴諸国ばなし卷三・七七^⑯〕

じやうぢう「常住」

○『常住（じやうぢう）怖（おそろ）しきは疊（た・み）の上なり』と『莊子（そうじ）』が『達生篇（たつしやうへん）』にも用心の事をかけり。

○常住（じやうぢう）長衣（ちやうへ）を好む。

〔新可笑記卷四・一二九^⑯〕
〔諸艶大鑑卷六・一二二^⑯〕

○少し見立（たて）おそけれ共、いまだよい所あるは、革足袋（かはたび）に雪踏（せつた）を常住（じやうぢう）（

）

〔日本永代藏卷三・七四^⑯〕

じやうぢうぎ「常住着」

○此うへは、万の唐織（からをり）を常住着（じやうぢうぎ）となすべし。

〔日本永代藏卷一・二五^⑯〕

じやうぢうふだん「常住不斷」

○是、死（しん）での徳（とく）、無心いわれず、五節句（せつく）かまはず、常住不斷（じやうぢうふだん）の上首尾（しゆび）、頭北西面（づほくさいめん）の樂床（らくどこ）、かぎりをしらず。

〔諸艶大鑑卷八・三三一^⑯〕

浮世草子集から江島其磧『浮世親仁形氣』（享保五年刊）を中心に「ふだん」を見るにこににする。というのも一作品中における「ふだん」の例が七例と多く、それに類義語がふんだんに見え、意味の上からは何等置き換えても遜色ないからにほかならないのだが、用例を見てみることにする。

浮世草子集『浮世親仁形氣』江島其磧（小学館日本古典文学全集を参照）

○それにつれておのづから心も優美に、花車（きやしや）なる事を好むほど、親父の**不斷**の心ばへをきのどく
がり、題目講中（だいもくこうぢゅう）を頼み、〈*平生の性質〉

〔一之卷・四六三④〕

○**不断**の慰みが、下男の久七を相手に相撲の稽古。〈*平常の慰み〉

〔一之卷・四六九⑯〕

○人の親の心は鬼にあらねども、子を思ふゆゑに、われとても好かぬ孔子顔して、いやながら**不断**行儀堅く、嘆
(かか)にざれ言(ごと)いひたいさへ口を開ぢて、息子にこはがらする看板、〈*平生〉

〔二之卷・四九〇③〕

○身代の事さりとは苦もなく、奢（おごり）がましき遊興もなれば、**不断**（ふだん）宿にありて物の本見て、
心を慰むる人多き中に、〈*つねに家にいて〉

〔三之卷・五一二③〕

○晋（しん）の七人親父どもは、酒を友として**不断**楽しみしに、伊丹・富田の二先生は天性の下戸（げこ）、
これ唐土（もうこし）の七賢と相違せり。〈*いつも〉

〔三之卷・五一八③〕

○われも**不断**侍行儀に、一腰を離さず水風呂（すいふろ）へ入るにも、湯殿に脇差を立てかけおきて、敵持（か
たきもち）同然の振舞ひ。〈*平生武士の立振舞〉

〔四之卷・五三八⑯〕

○米屋の親父も、達者を頼みにして、**不断**力業のみにて、仏とも法とも、知らずに死なれ、臨終の時も、無性に
空（そら）をつかまれしが、笑止（せうし）や地獄へ参られう。〈*平生力仕事ばかりして〉

〔四之卷・五四一⑬〕

つね 「常」

- あんな事する者をそのまま黙つてゐらるるは、**常**とは見おとした心底。〈ふだんの行ない〉〔一之卷・四七九②〕
- 総体われが**常**の行儀からが悪い。〈*ふだんのお行儀〉
- 藤井元徳といへる有徳人（うとくじん）の親父、**常に**列仙伝を見て、〈*いつも〉〔三之卷・五一二④〕
- 今までは夢に見し事もなき新町通ひ、これ六十の手習、半太夫・薰（かをる）、この二人を毎日の続々酒、役日（やくび）も**常**もほかへやらず、前より逢（あ）ひなれし男を、寂しがらせける。〈平常〉〔三之卷・五一二⑤〕
- ここに水音残渓（みなおとざんけい）といふ、糟毛（かすげ）頭の撫付（なでつけ）医者、**常**に変りし萌黄（もえぎ）の十徳（じつとく）の前を合せて、〈*普通の（医者）と違つて〉
- 第一**常**から他宗と貸し借りするが、聞えぬと思うてゐたに、雨降つて地固ると、〈*平生〉

いつも

- いつも**の川岸に毛氈（もうせん）敷かせて、素（す）酒を楽しむ折から、〈*いつもの〉

じやうぢゅう 「常住」

- 六十に近き下女とを使ひ、**常住**（じやうぢゅう）香（かう）の物（もの）菜（ざい）のほかには、いかないかな三月の鯛（たひ）一枚、〈*年中〉
- 常住**革足袋（かはたび）に雪駄（せつた）得意方をかけ回り、商売のほかなる事は、ただ見る辻放下（つじ

〔五之卷・五五九⑩〕

〔三之卷・五一九②〕

ばうか)にも目をやらず、
〈*いつも革足袋〉

〔二之卷・四九一③〕

へいぜい〔平生〕

○さりとは商売人といふものは、表裏（へうり）をもつて世を渡り、ことに平生の行儀じだらくにて、人たる者の身持とはいはれず」
〈*平生の行儀〉

次に滑稽本や人情本を手がかりに「ふだん」の用字をみることにする。

滑稽本『浮世風呂』式亭三馬（岩波新古典文学大系参照）

ふだん〔不斷〕

○あれがお蔭（かげ）で、私（わたし）が不断とつさまにしかられます。

前編卷之下・五八④

○こちとらは不斷（ふだん）息子（むすこ）や嫁（よめ）に云（いつ）て聞（きか）せるのさ。

二編卷之上・九五②

○した「(略)あの親（おや）めらが不断（ふだん）ぬかすからのことだ。

二編卷之下・一一八⑬

○さる「(略)不斷（ふだん）夜（よ）るばかり這入（へいつ）て居（ゐ）るから、たまたまはだまつてよこして
もよささうな物だが、依怙地悪（えこぢわり）い人よ。

三編卷之上・一七四④

○ばんとう「(略)モシエおまへ方（がた）に不断（ふだん）騒（さわ）ぎなさるなどいふは爰（こゝ）の事さ。

三編卷之上・一七八⑩

○初「イイエ出番（でばん）と引番（ひきばん）がござりますから、出番（でばん）の時に不断（ふだん）も召（め）すお屋敷（やしき）がござります。

三編卷之下・二〇三⑯

○こ「(略) ハテネ、**不斷 (ふだん)** 通 (とほ) りますが、エ、エ、覚 (おぼえ) あり。 四編卷之中・一二五一⑦

じやうふだん [常不斷]

○私 (わたし) が蔭 (かげ) になり日向 (ひなた) になりして、とつさまの前 (まへ) をつくろつて置 (おい) て、夫 (それ) でさへ **常不斷 (じやうふだん)** しくぢります。
前編卷之下・五八⑤

○ば、「(略) そつちの子 (こ) こそ **常不斷 (ぜうふだん)**、おらが孫 (まご) をなかせてよこすは。

二編卷之下・一一九⑤

○ば、「(略) おいらア **常不斷 (じやうふだん)** 喧嘩 (けんか) をするはな。

三編卷之上・一五七⑧

ふだんぎ [不斷着]

○丸「わたくしはネ、おつかさんにはねだつてね、あのウ路考茶 (ろかうちや) をね、**不斷着 (ふだんぎ)** にそめ てもらひました

三編卷之上・一六四⑧

○角「よいねへ。わたくしはネ、今 (いま) 着 (き) て居 (ゐ) る伊予染 (いよぞめ) を **不斷着 (ふだんぎ)** に いたすよ

三編卷之上・一六四⑨

ふだんざし [不断挿]

○さる「きつい事 (こと) はねへ。おいらが三年ぶりの給金 (きうきん) が **不断挿 (ふだんざし)** さ。

三編卷之上・一七二⑦

じやうぢゅう [常住]

○お山 「(略) **常住 (ぜうぢゅう)** 取替引替 (とりけへひつけへ) 見立直 (みたてなほ) しの女房を持人 (もつひと)

は気がねへのう

式亭三馬は「いつも、常に」の意として「ふだん（不斷）」、「常不斷（じやうふだん）」「常住（ぜうぢう）」の三様の語をしようしているが、「ふだん」は正しい用字である。「常住」もそのまま字音で読んでいて義音としないのである。

人情本『梅暦』為永春水（岩波文庫参照）

「春色梅兒譽美」四編十二卷（天保三、四年刊）

○長「イイエ銀座の宮芝さんが月に六斎（ろくさい）、近所のおやしきへお出（いで）だから、節をよく直してもらつて、**不断**は市原のお師匠さんへまいるヨ。

○米「ナゼわからないエ。コレ是を御覧。仇吉さんが**不断**にさしてゐる花（むかふうめ）に仇といふ字のさしこみの笄（かんざし）が、何でこゝにあるのだヘ。

○尼「（略）三日も尻の落着（おちつか）ぬ女は宅（うち）へもいれられずと、**不断**思案の絶（たえ）ない時節（をりから）、此間（こないだ）途中で櫻川が見えたゆゑ、だんだんの理（わけ）をはなして、

四編卷之十一・一六四⑦

「春色辰巳園」四編十二卷（天保四、六年刊）

○幸「（略）コレ串戯（じやうだん）にもおとつさんと、**不断**（ふだん）其方（そつち）が心易く、まんざら他人にしねへと思やア、たとへ色男にそひてへとか、まじめに亭主（ていし）をもちてへとか、いふ日になつても逃（にげ）はしねへ、

『ふだん』攷（萩原）

○母「(略) それだから **不斷** おれが云(いつ) たのだア、チツト體(からだ) をくるしめて、お客や旦那をよく勤めろ、

四編卷之十・三三五③

「春色恵の花」二編六卷（天保七年刊）

○勝「(略) **不斷**(ふだん) 女郎衆(ぢょうろし) の仕うつを見てゐる私(わちき) どもでせへあきれる節(とき) があるから、素人(しろうと) の宅(うち) ならどんなどかと思ひますヨ。 初編卷之一・三六五⑩

○▲「エ、よしてもくんねへ。おいらア **ふだん** さう思ふぜ。何の因果でこんな女沢山な場所へ来たかと、つくづくとふさぐ時があるぜ。 二編卷之上・四〇八⑬

「春抄媚景英對暖語」五編十五卷（天保九年刊）

○ます「マア私(わたくし) が他人(ひと) と違つて居ると申ますのはネ **不斷** 斯(かう) 思つて居ますわは。

初編卷之一・二三⑫

○ふさ「(略) なじみのお客と、主家(うち) へは口をかけられて、三味線不入(いらす) **常住**(ふだん) の衣類(なり) で、くるしからすと言はれしゆゑ、ちよいと着替(きかへ) し半衿つき、 三編卷之九・一四三⑭

○母「(略) 母(おや) の此身(おみら) 付(つい) て居るし、お前(めへ) の気質も知つてお在(いで) で、
不断 にも似合(にあは)ず此様(こんな) に永く不來(こず) にお在(いで) のは、何様(どう) もそれ計(ばか)りでは有(ある)まひヨ。 四編卷之十・一五六①

「春色梅美婦禰」五編十五卷（天保十二年刊）

○糸「ナニナニそれは悪い了簡(れうけん) だヨ。私(わちき) が **不斷** 思つて居る事を今言はふがネ、必ず悪く

お聞（きこ）でないヨ。

三編卷之八・三三三一⑨

○判「ナニナニ泣（ない）たら **常住（ふだん）**」よりも猶美麗（うつくしく）なつたから、今夜何卒（どうぞ）温順（おとなしく）寐られ、ば宜（いゝ）が、何様（どう）もむづかしいもんだ。

三編卷之九・三四六⑫

この為永春水とその門人による『梅曆』物は最初の時分は正しい「不斷」が使われているが、「春抄媚景英對暖語」と「春色梅美婦禰」の頃になると「不斷」の正しい用字に加えて「常住」の宛字が各一例ずつ使われだしている。ここではさらに類義語「いつも」「いつでも」も多く使われはじめ、「ふだん」の用字変遷状態の始まりを確認することができた。しかし、同時代の口語体国語資料の『夢醉独言』を見るに、正表記と仮名書きが一例といつたぐあいで、まだ特殊な表記法であつたようだ。

勝左衛門太郎夢醉『夢醉独言』（東洋文庫一三八『夢醉独言』平凡社刊参照）

夢醉は『夢醉独言』の中で、現代の若者が喜びそうな「納〈暖〉簾」「異〈意〉見」「不省〈肖〉」「約速〈束〉」「前代見〈未〉聞」「悪盜〈党〉」「休足〈息〉」「生界〈涯〉」「高〈幸〉運」「家材〈財〉」といった義音意讀の宛字を見せてくれる人物であるが、この「ふだん」の表記については、かつちりと正表記がなされている。

- **不断** の着類は破れざれば是（よし）として、勤の服はあかのつかざれば是とし、
〔一〇①〕
- **不断** の食ものも、おれにはまづいもの斗（ばか）りくわして、にくいば、あだとおもつていた。
〔一六⑥〕
- 始は遠慮をしたが、段々いたづらをしゐだし、相弟子にくまれ、**不断** 無らきめにあつた。
〔一七⑯〕
- 每月五十くら乗をすべしとて、借馬引にそふいて、藤助・伝蔵・市五郎といふやつの馬をかり、毎日毎日馬にばかりか、つていたが、しまへには馬を買つて、藤助にあづけておいたが、火事には**不断** でた。
〔一九⑭〕

○大勢の中で、「おれが高はいくらだ、四十俵では小給者（こきゅうもの）だ」といつて笑ひおるが**不斷**のこと故、おれも頭の息子故内輪にしておいたが、いろいろ馬鹿にそおる故、或とき木刀にておもふさまた、きちらし、あくたいをついてなかしてやつた。

〔二〇⑫〕
○左京のおふくろが不行蹟で、やたらに男ぐるひをしつて、**不斷** そうどふしてこまるから、せつかく普請をしたが、

○しまいには金廻りがよくなつて、**不斷** 身上の世話をしおつたが、わるがしこいやつで、仲間はみんながいろいろはぐらかされた。

〔七〇⑬〕

○夫から**不斷** 尋てやつたが、てふど支配が大兄の支配した越後水原になつたから、国の風俗人気の事を聞くから、おれが元いつた時の容子をはなして、勤向（つとめむき）の事も荒々知つた事ははなしてやつた。「八六④」

○おれはしらなるでふいに保科へ来たから、心当は**不斷** なにもしないでいた故に、今はびんぼうしてこまるが、しかたがなるとよふよあきらめた。

〔一一一⑨〕

○「其ひん用は**不斷** はりつぱのなりでいて或は神社又は参詣の多い寺又世の中の講しやく場いろいろのところへいつて、

〔一二三⑦〕

○肝心の旦那へは不忠至極をして、頭取様へも**不斷に**敵対して、とふとふ今の如くの身のうへになつた。

〔一三一⑥〕

○夫から御竹蔵番の門番は、**ふだん** 遊びに行く故に、いろいろ世話をしてくれたが、内へかへるが、氣概があるゆへたのんでおくつて貰た。

〔一八⑥〕

二 近代語の「ふだん」

1 宛字使用作家とその作品

仮名垣魯文著『西洋道中膝栗毛』（岩波文庫参照）

明治初期を代表する作家として魯文がいる。魯文は江戸の戯作文学を継承して明治三年から九年に渡って『西洋道中膝栗毛』を刊行している訳だが、この中で「ふだん」の表記を見るに明治五年までに刊行した第十一編までに平仮名表記の「ふだん」^{注6}から宛字「平常」の「ふだん」へと変り、さらに、第十二編以後七杉子總生寛の代作であるが、ここでは「平生」そして「不斷」が使用されていて同一の作者にしても、また同時代の代作者にしても統一された用字法がなかったことを物語っている。

○いや、弥次さんも、北八さんも、東京にサア生（うま）れて、世のなかのことサア、あんでもしりぬいたやうに、
ふだん じまんのうさつしやるが、これはなしのたねのウ、しらツしやらねヘチウことは、あんたるこんだぞ。

〔上巻三編一二五⑫〕

○通／そして、**ふだん** たいそいいろ男がつて、じまんするが、おめへは人間の女におもひつかれるのじやアねへの。

『ふだん』攷（萩原）

○しかし通さんといふ人も、**ふだん**欲がつ、張（ぱ）ツてゐるもんだから、こんなめにあふのサ。

○それといふが、身じんまくがい、から對妓（あひかた）に瘡氣（かさけ）があつても、此方（こっち）のからだうけつけさせねへなア、**平常（ふだん）**の行状（ぎやうじやう）によるのだねエ、通さん。

○コレ、北八。どうしたもンダ。**平常（ふだん）**厄介（やつけへ）にばかりなツてゐる、通さんにむかつて、をとなしくねへ。

○そのくせ、生根玉（しやうねだま）は億病（おくびやう）で、**平常（ふだん）**はちつとのことがあると、きん玉が上（あが）ツたり下（さが）ツたりするが、イザといふと親玉根生（おやだまこんじやう）が出て、どんな悪玉（あくだま）でも、とツておせへる氣になるから、こまりやす。

○其處（そこ）はおめへ、**平常（ふだん）**兄弟（きやうでへ）よりむつましく附合（つきあ）ツてゐるから大概（てへげへ）しりきつてゐなさりうなもんじやアねへか。

〔下巻十編 五六⑥〕
〔下巻十編 五八⑫〕

〔下巻十一編八三⑬〕

○『吾子（おめへ）は、近頃大連（おほぜい）で洋行をするといふことを聞いたが、斯（か）ういふ便利な世界になつた上にやア、案じることはねへ様なすじだが、遠い海を乗り出すについちゃア、我輩（おいら）も、**平生（ふだん）**顛廻（ひいき）におもつて居るから、一寸（ちよつと）あつて、何やかや西洋の様子を聞いたこともあるから、はなして一杯酌（く）み別れをしよう、と思つたから、呼に遣つたんだが、マアどういふ子細（わけ）で、洋行（たび）をする氣になつたんだ』

〔下巻十二編九九⑧〕

○また、**平生（ふだん）** 借金（せわ）になつたからといつても、印紙（いんし）を一葉（いちめへ）はれといふ譯（わけ）じやアなし、

〔下巻十二編一〇〇⑧〕

○弥次／氣狂（きちげ）ひじみた野郎じやアねいか、**不斷（ふせん）** 手鼻（てばな）ばかり、かんで居（ゐ）やアがる癖に。

〔下巻十四編一五九⑧〕

末広鐵腸の政治小説『雪中梅』（名著複刻全集近代文学館参照）

末広鐵腸は「ふだん」の漢字表記をすべて「平生」の宛字によつて記している。

○何（なん）ば氣丈夫（きぢやうぶ）な人（ひと）でも大病（たいびやう）になると **平生（ふだん）** とハ違（ちが）

ふからツイお前達（まへたち）に話（はな）すことを忘（わす）れて仕舞（しま）ハれたのだらふ 下・九六①

○門口（かどぎち）までお立寄（たちよ）りになりました旦那（だんな）ハ **平生（ふだん）** お謹（つゝ）しみの善（よ）いのに昨晩（さくばん）の様（やう）なことハ不思議（ふしぎ）だと皆（み）んながさう申（まを）して居（を）りますよ

下・一三六⑦

○貴君（あなた）ハ御承知（ごしようち）でハありませんがお嬢（ぢやう）さんハ **平生（ふだん）** から貴君（あなた）のことを御心配（ごしんぱい）なさいまして蔭（かげ）ながら貴君（あなた）の御世話（おせわ）をなさつたこともありますから貴君（あなた）もあの様（やう）な事（こと）を仰（おつ）しやると罰（ばち）があたりますヨ

下・一三七④

○下女「誠（まこと）に御本（ごほん）がお好（すき）で学問（がくもん）が御出来（おでき）なさると申（まを）すことですが **平生（ふだん）** 御内輪（おうちわ）の上（うへ）に奉公人（ほうこうにん）などへ御優（やさし）

いものですから皆（み）んなが誉（ほ）めますワ

下・一三八①

○今（いま）一つの御願（おねがひ）と申（まを）しますのハ私（わたくし）の親（おや）ハ御承知（ごしおうち）の通（とほ）りの氣質（きしつ）で自分（じぶん）ハ世（よ）の中（なか）の益（やく）に立（た）つ様（やう）なことハ出来（でき）ぬが國家（こくか）の為（た）めに有用（いうよう）の事業（じげふ）と見（み）たならば財産（ざいさん）を遣（つか）ひ棄（す）てゝも苦（くる）しくないと平生（ふだん）から申（まを）して居（を）りました

三遊亭円朝作『牡丹燈籠』と『真景累ヶ淵』（岩波文庫使用）

三遊亭円朝が語る講談話を速記したものであるが、『牡丹燈籠』（若林指藏筆記）では「平常」の義音による宛字で統一表記が見られる。

○平常（ふだん）は私（わたくし）と嬢様ばかりですから、淋しくつて困つて居（ゐ）るところ、誠に有難うございます。

〔牡丹燈籠・一七⑦〕

○剰（あまつさ）へ来月の四日中川で殿様を殺そうといふ巧みの一五一什（いちぶしじふ）を委（くは）しく殿様の前へ並べ立て、そしてお手打にならうといふ氣でありますから、少しも臆する色もなく、平常（ふだん）の通りで居る。

〔牡丹燈籠・八二⑧〕

○竹「ナニ疑りは致しませんが、孝助どんは平常（ふだん）の気性（きしやう）にも似合ないことだと存じまして些（ちつ）とばかり。

〔牡丹燈籠・八九⑩〕

次に、『真景累ヶ淵』（小相英太郎筆記）では正表記の「不斷」の他に「平常」「平素」「平生」「常」の義音によ

る宛字が使われ、「ふだんぎ」の表記にも「常着」などの宛字が見えるのである。次に示す。

○ひつついで抜けないが、これは旦那の【不断】差す脇差で私（わし）も能（よ）く知つてをります。

『真景累ヶ淵』二〇五⑧

○先刻（さつき）逢つたら、矢張（やつぱり）平常着て居る小紋の寝衣（ねまき）を着て、涙をボロボロ翻（こぼ）して、私が悪いのだから元の様に綺麗さっぱりとあかの他人になつて交際（つきあ）ひます、

『真景累ヶ淵』六七⑨

○へエ私（わつち）も世話に成つた旦那で、平常（ふだん）優しくして甚蔵や悪い事をすると村へ置かねえぞと、親切に意見をいつて、喧（やかま）しい事は喧しいけれども、時々小遣（こづけえ）もおくんなすつてね、

『真景累ヶ淵』一五三⑫

○私（わつち）がお前（めえ）さんには平生（ふだん）お世話に成つて居りますから、娘を殺して金を取るやうな人ではねえ事は知つて居りますが、宜（よ）うがすか、

『真景累ヶ淵』九三⑦

○甚蔵は平素（ふだん）悪（にく）まれもの、何うか死んで呉れ、ばい、と思つてゐた處、甚蔵が絹川べりで鉄砲で撃殺（うちころ）されてゐるといふのを村の人達が聞込んで、ア、是から安心だ、『真景累ヶ淵』一六六⑩

○惣次郎もつくづく困りましたが、お隅は平素（ふだん）から一角は酒の上が悪く我儘なのを知つてをります、

『真景累ヶ淵』一七三⑫

○随分旨（うま）い物（もん）だ常（ふだん）なら食べるだけれど、やア食へよウ。

『真景累ヶ淵』九六⑭

フダンぎ「不斷着」

○豊「あい、と膝に手を突いて起上がりますると、鼠小紋（ねずみこもん）の常着（ふだんぎ）を寝着（ねまき）におろして居るのが、汚れッ気が来てをり、お納戸色（なんどいろ）の下メ（したじめ）を乳の下に堅くメ（し）め縫（くび）れたやうに瘦せて居ります。『真景累ヶ淵』五三③

○人柄の好（い）い、衣装（なり）は常着（ふだんぎ）だから好くはございませんが、なれども村方でも大盡（だいじん）の娘と思ふ揃（こしらへ）、『真景累ヶ淵』八七⑫

さらに複雑なことに「平常」を類義語の「いつも」とも訓じてもいるのである。

○少しぐれえ薄く痕（あと）が付くべえけれども、平常（いつも）の白粉を着ければ知れねえ様になり段々薄くなるから心配（しんぺえ）しねえがえ、よ。

このように速記による書き込みの場合、同一の筆記であろうとも話の記述が数日に渡ることと即日のうちに活字化されることから、後日表記の統一を見るまでもなく筆記者の出筆姿勢（その日その日の社会的に認知されている表記の中で思うが儘表記）に委ねられ、複数の表記がなされるに至ったのではなかろかと考えるのである。

夏目漱石『吾が輩は猫である』（新選名著複刻全集　近代文学館と日本近代文学大系参照）

漱石の「ふだん」に対する表記の中で注目したいのは、現代の私たちが「ふだん」という字を漢字で表記する場合に概ね用いる「普段」の用字が見えることである。この「普段」の表記は『吾が輩は猫である』では一例しか使用されていないが、「草枕」に二例使用されていて、確実に漱石が「ふだん」の用字の一つとして用いたことが判明した。また、漱石は『吾が輩は猫である』の中ではルビをほとんど付していないため、「平常」や「平生」「平素」「平時」などをどう読むのか判定しかねるのである。というのも、その他の作品で「平常」、「平生」に意讀表記の

「ふだん」が見えるからに外ならない。ここではその事からこの判定の手段として日本近代文学大系の『吾が輩は猫である』のルビ表記を以て検索を試みた次第である。以下に示す。

普段（ふだん）

○此時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、是も普段「ふだん」大事にする尻尾の御蔭だなと気が付いて見ると只置かれない。
〔上一六四⑤・一四四⑬〕

平常（ふだん）

○吾輩の主人の我儘で偏狭な事は前から承知して居たが、平常「ふだん」は言葉数も使はないので何だか了解しかねる点がある様に思はれて居た。
〔上一〇五⑦・一〇八⑯〕

○平常「ふだん」神の制作に就て其出来栄を或は無能の結果ではあるまいかと疑つて居たのに、それを一時に打ち消すに足る程な特徴を有して居たからである。
〔上二四八⑤・一九五④〕

○吾輩は無論泥棒に多くの知己は持たぬが、其行為の乱暴な所から平常「ふだん」想像して私かに胸中に描いて居た顔はないでもない。
〔上二四八⑩・一九五⑧〕

○希臘人や、羅馬人は平常「ふだん」から裸体を見做れて居たのだから、之を以て風教上の利害の関係がある坏事とは毫も思ひ及ばなかつただらうが北欧は寒い所だ。
〔中七九⑫・二六七⑯〕

○尤も平常「ふだん」からあまり晴れ晴れしい眼ではない。
〔中一八八⑭・三三三⑯〕

平常（いつも）

○もしそれが平常「いつも」の通りわかるなら一寸えらい所がある。
〔上三八⑤・六八⑦〕

平常（へいじやう）

○「危きに臨めば **平常「へいじやう」** なし能はざる所のものを為し能ふ。 [上四九⑤・七四⑯]

○実は其両三日前に逢つた時は **平常「へいじやう」** の通り何所も悪ひ様には見受けられませんでしたから、 [上九二⑪・一〇一⑤]

○競走の念、勝たう勝たうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一步進めば彼等が

平常「へいじやう」 罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て氣の毒の至りである。

[上一〇六②・一〇九⑤]

平時（へいじ）

○然し此時吾輩の心臓は慥かに **平時「へいじ」** よりも烈しく鼓動して居つた。 [上一五③・五四⑪]

平生（へいぜい）

○それも **平生「へいぜい」** 吾輩が彼の背中へ乗る時に少しは好い顔でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こ
つちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。

[上一三①・五三⑤]

○豪奢風流の極度と **平生「へいぜい」** よりひそかに食指を動かし居候次第御諒察可被下候……」

[上七三⑥・八九⑩]

○吾輩は **平生「へいぜい」** 眷顧を辱うする多々良君其人も亦此同類ならんとは今が今迄夢にも知らなかつた。

[上二六七⑤・二一〇六⑯]

○あの羽根は平生「へいせい」大事に畳んであるが、引き搔き方が烈しいと、ぱつと乱れて中から吉野紙の様な薄色の下着があらはれる。

〔中六〇①・二五五②〕

○平生「へいせい」なら猪口に一杯ときめて居るのを、もう四杯も飲んだ。

〔中一〇六④・二八三⑦〕

○かう覺つたから平生「へいせい」かゝりつけの甘木先生を迎へて診察を受けて見様と云ふ量見を起したのである。

〔中一六二⑧・三一七⑯〕

○平生「へいせい」は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のない位平凡である。

〔下六〇⑧・三九七④〕

○平生「へいせい」なら、そらサエヂ、チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に対しても痛み入つて居る上へ妙齡の女性が学校で覚え立ての小笠原流で、乙に気取つた手つきをして茶碗を突き付けたのだから、坊主は大に苦悶の體に見える。

〔下六五④・三九九⑯〕

○然し自分で自分の鼻の高さが分らないと同じ様に、自己の何物かは中々見当がつき悪くいと見えて、

平生「へいせい」から軽蔑して居る猫に向つてさへ斯様な質問をかけるのであらう。

〔下七五⑤・四〇五⑯〕

○「だつて君は平生「へいせい」羅甸語が読めると云つてるぢやないか」

〔下一四〇⑩・四四三⑯〕

○山道八丁を大平と云ふ所迄登るのだが、平生「へいせい」なら臆病な僕の事だから、恐しくつて堪らない所だけれども、一心不乱となると不思議なもので、怖いにも怖くないにも、毛頭そんあ念はてんで心の中に起らないよ。

〔下一五三⑦・四五一⑬〕

平生（いつも）

○平生「いつも」叱り付けたり、口を聞かなかつたり、身上の苦労をさせたり、小供の世話をさせたりする許りで何一つ洒掃薪水の労に酬いた事はない。

○「知らん、近頃は合はんから」と主人は平生「いつも」の通り陰気である。 [上一三四⑪・一二六⑭]

○此発明におやと驚いた妻君は夫ぢや、みんなで大人しく御遊びなさいと平生「いつも」の通り針箱を出して仕事に取りかかる。

平素（へいそ）

○所謂禍を未萌に防ぐの功徳にも相成り平素「へいそ」逸樂を擅に致し候

例（れい）

○そろそろ例「れい」の通になつて来たと主人は無言で微笑する。

ふだんぎ「不斷着・普段着」

○「山の芋許りなら困りやしませんが、不斷着「ふだんぎ」をみんな取つて行きました」

[上七五⑯・九〇㉑]
[上七一⑩・八八⑨]

○頭に外行（よそゆき）も普段着「ふだんぎ」もないから例の頭に極つてるが

[中一二九⑬・二九七⑰]

○妻君は肌寒の襦袢の襟をかき合せて、洗い晒しの不斷着「ふだんぎ」を縫ふ。

[下二二一②・四八四③]

その他の作品

○給仕（きふじ）の時（とき）には、近頃（ちかごろ）は客（きやく）がないので、ほかの座敷（ざしき）は掃除

(さうぢ) がしてないから、**普段**（ふだん）使（つか）つて居（ゐ）る部屋（へや）で我慢（がまん）してくれと云（い）つた。

「**普段**（ふだん）は奥様（おくさま）が居（を）ります」

〔『草枕』三・一八八①〕
〔『草枕』四・二〇三⑤〕

○**平常**（ふだん）から天地（てんち）の間（あひだ）に居候（ゐさふらふ）をして居（ゐ）る様（やう）に、小（ちひ）さく構（かま）へてゐるのが如何（いか）にも憐（あは）れに見（み）えたが、今夜（こんや）は憐（あは）れ所（どころ）の騒（さわ）ぎではない。

〔『坊つちやん』七・一一三⑯〕

○老人（らうじん）とは**平常**（ふだん）からの昵懃（ぢつこん）と見える。

〔『草枕』八・一二三九⑬〕

○「**平生**（ふだん）ですら、さうなら病氣（びやうき）の時（とき）は猶更（なほさら）だ。

〔『野分』十二・四五ー⑯〕

○同時（どうじ）に此（この）頭（あたま）の働（はたら）きを攬（か）き亂（みだ）す自分（じぶん）の周圍（しうゐ）に就（つ）いての不平（ふへい）も**常時**（ふだん）よりは高（たか）まつて來（き）た。

〔『道草』五十一・三九九④〕

○斯（か）く事實（じじつ）の上（うへ）に於（おい）て突然（とつぜん）人間（にんげん）を平等（びやうどう）に視（み）た彼（かれ）は、**不斷**（ふだん）から輕蔑（けいべつ）してゐた姉（あね）に對（たい）して多少（たせう）極（きま）りの惡（わる）い思（おも）ひをしなければならなかつた。〔『道草』六十七・四三八⑰〕

○貴方（あなた）が**不斷**（ふだん）からそんな僻（ひが）んだ眼（め）で他（ひと）を見（み）てゐらしやるから・・・・・・

フダンぎ「不斷着」

○ぶつきら棒（ぼう）に身（み）をひねつた下駄（げた）がけの野武士（のぶし）と、不断着（ふだんぎ）の銘仙（めいせん）さへしなやかに着（き）こなした上（うへ）、腰（こし）から上（うへ）を、おとなしく反（そ）り身（み）に控（ひか）へたる瘦形（やさすがた）。

〔『草枕』十二・二八七⑪〕

明治四十年以降の漱石の創作活動の指針は文字表記の面にも自ずと表出しているのではなかろうか。傑作中の傑作と言われる『こゝろ』を例に取つて、この「ふだん」に目を向けると、今までの様な宛字による表記例が見られず、すべて正表記の「不斷」が使われ、「平生」も「へいせい」に「平素」も「へいそ」と統一されて使用していることが解る。例外として「しんぼう」の「辛防」、「じょうだん」の「笑談」といった宛字があるが・・・。次に「不斷」の例を示す。

○私は今私の前に坐つてゐるのが、一人の罪人であつて、不断（ふだん）から尊敬してゐる先生でないやうな氣がした。

〔上三十一・一一〇⑪〕

〔中九・一四二⑭〕

○其上食慾は不断（ふだん）よりも進んだ。

○我々（われわれ）は固（もと）より不断（ふだん）以上（いじやう）に調子（てうし）を張（は）り上（あ）げて、耳元（みみもと）へ口（くち）を寄（よ）せるやうにしなければならなかつた。〔中十六・一五八③〕

○然（しか）し御嬢（おぢやう）さんは私（わたくし）の顔色（かほいろ）を見（み）て、すぐ不断（ふだん）の表情（へうじやう）に歸（かへ）りました。

〔中二二六⑯〕

○不斷（ふだん）も斯（こ）んな風（ふう）に御互（おたがひ）が仕切（しきり）一枚（いちまい）を間（あひだ）

に置（お）いて黙（だま）り合（あ）つてゐる場合（ばあひ）は始終（しじゅう）あつたのですが、私（わたくし）はKが靜（しづか）であればある程（ほど）、彼（かれ）の存在（そんざい）を忘（わす）れるのが普通（ふつう）の状態（じやうたい）だつたのですから、其時（そのとき）の私（わたくし）は餘程（よほど）調子（てうし）が狂（くる）つてゐたものと見なければなりません。

〔中三十七・二三八②〕

○けれども彼（かれ）の聲（こゑ）は不不斷（ふだん）よりも却（かへつ）て落（お）ち付（つ）いてゐた位（くらゐ）でした。

〔中四十三・二五一②〕

○私（わたくし）が不不斷（ふだん）からひねくれた考（かんが）へで彼女（かのじよ）を觀察（かんさつ）してゐるために、そんな事（こと）も云（い）ふやうになるのだと恨（うら）みました。〔中五十四・二七四⑥〕

フダンぎ「不不斷着」

○奥（おく）さんは寐巻（ねまき）の上（うへ）へ不不斷着（ふだんぎ）の羽織（はおり）を引掛け（ひっかけ）て私（わたくし）の後（あと）に跟（つ）いて來（き）ました。

〔中四十九・二六四⑯〕

国木田独歩の小説作品集（角川書店刊日本近代文学大系参照）

国木田独歩は「ふだん」の表記法として意読表記の「平常」と「平時」とを用いている。その「平常」を他に「いつも」「牛肉と馬鈴薯」一五〇⑨『富岡先生』一八四⑥『春の鳥』四・三一四⑬『竹の木戸』三四八⑮三五三⑦と表記したり、「へいぜい」「『運命論者』三〇二⑪」「かねて」「『竹の木戸』三三六⑤」と表記したりもする。「平時」も「いつも」「『富岡先生』一八一③『少年の悲哀』一〇一⑦『酒中日記』一五六⑭『運命論者』二八九⑥⑯一九八⑯『竹の木戸』三五四⑥と表記している。次に「ふだん」の用例を示す。

○それも月（つき）の十日（とをか）と二十日（はつか）は琴平（こんぴら）の縁日（えんにち）で、中門（なかもん）を出入（ではいり）する人（ひと）の多少（すこし）は通（とほ）るが、實（じつ）、平常（ふだん）、此町（このまち）に用事（ようじ）ある者（もの）でなければ餘（あま）り人（ひと）の往來（ゆき、）しない所（ところ）である。

○『然（し）かし能（よ）くしたもので、其（その）翌日（よくじつ）少女（むすめ）の顔（かほ）を見（み）ると平常（ふだん）に變（かは）つて居（ゐ）ない、

〔『牛肉と馬鈴薯』一六四⑯〕

○『さうとも！それに先生（せんせい）は平常（ふだん）から高山々々（たかやまたかやま）と讚（ほ）めちぎつて居（ゐ）たから多分（たぶん）井下伯（ゐのしたはく）に言（い）つてお梅嬢（うめさん）を高山（たかやま）に押付（おしつ）ける積（つも）りだらう、

〔『富岡先生』一八三⑦〕

○其（その）翌日（よくじつ）より校長（こうちやう）細川（ほそかは）は出勤（しゅつきん）して平常（ふだん）の如（ごと）く職務（しょくむ）を執（と）つて居（ゐ）たが彼（かれ）の胸中（きょううちゅう）には生（うま）れ落（お）ちて以來（いらい）未（ま）だ経験したことのない、苦惱が燃（も）えて居（ゐ）るのである。

〔『富岡先生』五・一九二⑭〕

○然（しか）し梅子（うめこ）が平常（ふだん）何人（なんびと）に向（むかつ）ても平等（びやうどう）荷優（やさ）しく何人（なんびと）に向（むかつ）ても特種（とくしゅ）の情態（こゝろもち）を示（しめ）したことのないだけ、細川（ほそかは）は十分（じふざん）この一念（いちねん）を信（しん）ずることが出來（でき）ぬ。

〔『富岡先生』五・一九三⑭〕

○梅子（うめこ）も座（ざ）に着（つ）いて居（ゐ）る、一見一座（いつけんいちざ）の光景（やうす）が平常（ふだん）と違（ちが）つて居（ゐ）る。

〔『富岡先生』一九五⑭〕

○徳次郎は平常（ふだん）にない懊（むつか）しい顔（かほ）をして居（ゐ）たが、女（をんな）のさす盃（さかづき）を受けて一呼吸（ひといき）に呑（の）み干（ほ）し、『愈々（いよいよ）何日（いつ）と決定（きまつた？』と女（をんな）の顔（かほ）を熟（じつ）と見（み）ながら訊（たづ）ねた。

〔『少年の悲哀』一一〇四⑥〕

○岩——の士族屋敷（しそくやしき）も此日は其ために多少の談話（だんわ）と笑聲（せうせい）とを増（ま）し、日常（ひごろ）淋（さ）びしい杉の杜（もり）附近（ふきん）までが何（なん）となく平時（ふだん）と異（ちがち）てゐた。

〔『河霧』一四八⑤〕

永井荷風『腕くらべ』（新選名著複刻全集近代文学館参照）

永井荷風は「平素」を「平素興行の劇場」「おさらひ一一六⑥」、「平素時間だけは規則正しい」「菊尾花一四三⑪」とルビ無表記で使用した後に次の「平素（ふだん）」を記述している。

○若しこの上我儘を云つて無理に瀬川を引留めたなら平素（ふだん）から藝人には似合はない一本氣な我儘な御世辞のない瀬川のこと

〔きのふけふ二二三一⑭〕

それから現代の私たちが一般に使用するところの、そして漱石が使用していた借字表記の宛字「普段」も二例見える。

○すると普段（ふだん）の手癖になつてゐるのですぐ帶の間の化粧鏡を取り出し髪を撫で、白粉紙で顔を拭きながら、ぼんや

り鏡の面を見てゐる中、駒代はどういふ譯ともなく日頃絶えず胸の底に往來してゐるいつもの屈托（くつたく）に暮れてしまつた。

「ほたる草」一七^⑭

- わたしも隨分馬鹿だわねえ、**普段**は何ぼ何でも出來ない事だと思ふからに自分から先づ物珍しい心持してつい調子に乗れば、どうでせう向の人もあんまりだわ、

〔菊尾花一四八③〕

志賀直哉『暗夜行路』（角川書店刊日本近代文学大系参照）

志賀直哉のたつた一つの長編小説である『暗夜行路』を見るに、「ふだん」の用字は「不斷」は一例も見えず、代つて「普段」に統一^{注7}されて使用されていることが解る。この作品は志賀直哉が途中九年間という時間を空けて後編部分を脱稿したものであるが、この間にあってもこの「ふだん」の借字表記「普段」は安定している。いわば、志賀直哉を含めて昭和十二年のこの頃に借字表記「普段」の安定期を迎えるに至つた事を物語るかのようである。

- **普段** 下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

〔前編序詞・五四⑫〕

〔前編序詞・五七⑯〕

- お榮は**普段**少しも美しく見えなかつた。
- それでなければ阪口をわざわざ連出して来て、自分の前でこれ程にやつつけることが**普段**の彼の氣質としては少し不自然に考へられた。

〔前編第一、一・六六^⑯〕

- 彼は自分の**普段**の氣分を根こそぎ何處かへ持つて行かれたやうな氣がした。
- 〔前編第一、二・七四②〕

○**普段**何氣なく美しい人を見る時とは、もつと深い何かで惹きつけられ、彼の胸は波立つた。

〔後編第三、一・二六三⑨〕

- 「君の**普段**行く所でいいぢやないか」と答へた。

〔後編第三、十五・三五一⑯〕

○三人は一寸した事にもよく笑ひ、**普段** それ程でもない久世までがたわいなく滑稽な事を饒舌（しゃべ）つて居た。

〔後編第四、五・四一六⑥〕

2 正字使用作家とその作品

森鷗外『雁』（新選名著複刻全集近代文学館／角川書店刊日本近代文学大系参照）

鷗外は実に忠実な漢字表記法をみせてくれる。注8類義語の「平生」の四例はすべて「へいせい」と読み、「ふだん」

はすべて正しく「不斷」と表記し、統一のとれた使用がなされている。このことは他の「笑談（ぜうだん）」や「器量（きりやう）」、「種性（すじやう）」、「第宅（ていたく）」などの語表記にも及び鷗外自身の中で揺らぎの少ない表記法が確立していた事（『瀧江抽斎』の中で抽斎の詞を借りて言えば「凡そ学問の道は、六經を治め聖人の道を身に行ふを主とする事は勿論なり。扱其六經を読み明めむとするには必ず其一言一句をも審に研究せざるべからず。一言一句を研究するには、文字の音義を詳にすること肝要なり。文字の音義を詳にするには、先づ善本を多く求めて、異同を比讐し、謬誤を校正し、其字句を定めて後に、小學に熟練して、義理始て明了なることを得」を自ら体得したものと言えよう）を物語るものである。

○併し末造は此席で幻のやうに浮かんだ幸福の影を、無意識に直覺しつつも、なぜ自分の家庭生活にかう云ふ味が出ないかと反省したり、かう云ふ餘所行の感情を**不斷（ふだん）**に維持するには、どれ丈の要約がいるか、その要約が自分の妻に充たされるものか、充たされないものかと商量したりする程の、緻密な思慮は持つてゐなかつた。

〔『雁』漆六五①・一二五③〕

○中には随分職人の真似をして、小店と云ふ所を冷やかすのが面白いなどと云つて、**不斷（ふだん）**も職人のやうな詞遣をしてゐる人がある。

○お玉は手持無沙汰なやうに、**不斷（ふだん）**自分のゐる所にゐて、火鉢の縁を撫でたり、火箸をいちつたりしながら、恥かしげに、詞數少く受答をしてゐる。

○**不斷（ふだん）**から自慢に思つて、貧しい中にも荒い事をさせずに、身綺麗にさせて置いた積ではあつたが、十日ばかり見ずにあるうちに、丸で生れ替つて來たやうである。

〔『雁』拾壹一〇四⑥・一四〇⑥〕

○なぜと云ふに、末造は夫婦喧嘩をした日には、神經が緊張してゐて、**不斷（ふだん）**氣の附かぬ程の事にも氣が附く。

○喧嘩をして内を飛び出した氣分が、拭ひ去つたやうに消えてしまつて、**不斷（ふだん）**此男のどこかに潜んでゐる、優しい心が表面に浮かび出でる。

〔『雁』拾漆一九〇④・一七一⑯〕

○これは**不斷（ふだん）**來る髪結が人の好い女で、餘所行の時に結ひに往けと云つて、紹介して置いてくれたのに、これまでまだ一度も往かなかつた内なのである。

〔『雁』貳拾壹二五四④・一九五⑯〕

その他の作品例

○島原征伐が此年から三年前寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜はつたり、鷹狩の鶴を下されたり、**不斷**懇懃を盡してゐた將軍家の事であるから、此度の大病を聞いて、先例の許す限の慰問をさせたのも尤もである。

○又其大小を甚五郎が**不斷**褒めてゐたさうである。

〔『佐橋甚五郎』三三四⑭〕

〔『阿部一族』二九〇⑮〕

○甚五郎は運よく鷺を撃つたので、**不斷**望を掛けてゐた蜂谷の大小を貰はうと云つた。

〔『佐橋甚五郎』三三四⑯〕

○源太夫が家内の者の話に、甚五郎は**不斷**小判百両を入れた胴巻を肌に着けてゐたさうである。

〔『佐橋甚五郎』三三八⑨〕

ふだんぎ「不斷着」

○陸が人と成つてから後は、瀧江の家では重ねものから**不斷着**（ふだんぎ）まで殆ど外へ出して裁縫させたことがない。

○髪を綺麗に撫で附けて、好い分の**不斷着**に着換へてゐる。

〔『瀧江抽斎』その百十九・二七四①〕

〔『阿部一族』二九六⑩〕

〔徳田秋声『あらくれ』と『徽』（新選名著複刻全集近代文学館参照）〕

徳田秋声もこの「ふだん」の表記を正しくする一人である。彼は類義語の「平生」という語を使わず、すべてこの「不斷」と「いつも」の「常時」で表現している。このうち二例は「不斷に」として「絶え間なく」の意に使用し、「不斷の」一例は「連日（いつも）」の意に使用するものである。

○お島が盆暮に生家を訪ねる時には、砂糖袋か鮭を携へて作が屹度（きつと）お伴をするのであつたが、この二三年商賣の方を助（す）けなどするために、時には金の仕舞つてある押入や用簞笥の鍵を委されるやうになつてからは、**不斷**（ふだん）は仲のわるい姉や、母親の感化から、ことも動（と）もすると自分に一種の輕侮（けいぶ）を持つてゐる妹に、半衿（はんえり）や下駄や色々の物を買つて行つて、お辭儀されるのを矜（ほこ）りとした。

〔『あらくれ』十三・三九⑦〕

○馬糧用達 (ぱりやうようたし) の西田 (にしだ) の爺 (ぢい) から、**不斷 (ふだん)** こゝの世話 (せわ) になつてゐる、小作人 (こさくにん) に至 (いた) るまで、お島 (しま) では隨分 (ずゐぶん) 助 (たす) かつてゐる連中 (れんぢう) も、お島 (しま) が一切 (さい) を取仕切 (とりしき) る時 (とき) の來 (く) るのを待設 (まちまう) けてゐるらしくも思 (おも) はれた。

〔『あらくれ』十八・五六⑯〕

○この老人 (らうじん) の話 (はなし) によると、養家 (やうか) の財産 (ざいさん) は、お島 (しま) などの**不斷 (ふだん)** 考 (かんが) へてゐるよりは、廻 (はるか) に大 (おほ) きいものであつた。

〔『あらくれ』十九・六〇②〕

○**不斷 (ふだん)** 養父 (やうふ) 等 (ら) の居間 (ゐま) にしてゐる六疊 (でふ) の部屋 (へや) に敷 (し) かれた座布團 (ざぶとん) も、大概 (たいがい) 塞 (ふさ) がつてゐた。 〔『あらくれ』二十一・六四⑩〕

○お島 (しま) が**不斷 (ふだん)** から日 (め) をかけてやつてゐる銀 (ぎん) さんと云 (い) ふ年取 (としと) つた車夫 (しゃふ) が、誰 (だれ) の指圖 (さしづ) とも知 (し) れず、俾 (くるま) を持 (も) つて迎 (むか) ひに來 (き) たのは、お島 (しま) たちが漸 (やつ) と床 (どこ) に就 (つ) かうとしてゐる頃 (ころ) であつた。

〔『あらくれ』二十七・八〇③〕

○旅 (たび) から歸 (かへ) つてからの鶴 (つる) さんに、始終 (しじう) こつてり作 (づくり) の顔容 (かほかたち) を見 (み) せることを怠 (おこた) らずにゐたお島 (しま) の鏡臺 (きやうだい) には、何 (なん) の考慮 (かうりよ) もなしに自暴 (やけ) に費 (つひや) さる、化粧品 (けしやうひん) の瓶 (びん) が、**不斷 (ふだん)** に取出 (とりだ) されてあつた。

〔『あらくれ』三十七・一一④〕

○「大丈夫（だいぢやうぶ）とは思（おも）ふけれど、偶然（ひよつ）とするとおゆふは歸（かへ）つて來（こ）ないかも知（し）れないね。不_断（ふだん）から善（よ）く死（し）ぬ死（し）ぬと言（い）つてゐたから。」

〔『あらくれ』四十五・一三四⑦〕

○指環（ゆびわ）なども、顔（かほ）の廣（ひろ）い彼女（かのをんな）は、何處（どこ）かの寶玉屋（はうぎよくや）からか取（と）つて來（き）て、見（み）なれない品（しな）を不_断（ふだん）にはめてゐた。

〔『あらくれ』九十六・一八七③〕

○晩飯には、青豆などの煮たのが、丂に盛られて餉臺（ちやぶだい）のうへに置かれ、几帳面に掃除されたランプの灯も、不_断（ふだん）より明るいやうに思はれた。

〔『徽』二・九④〕

○M先生が病苦を忘れるために折々試みてゐたモルヒネ注射も、秋の頃は不_断（ふだん）のやうになつてゐた。

〔『徽』三十六・一五九⑩〕

○お銀の一時片附いてゐた男が、お銀に逃出されてから間もなく、不_断（ふだん）から反（そり）の合はなかつた繼母を斬りつけたと云ふことは、お銀の頭にまた生々（なまなま）しい事實のやうに思はれて來た。

〔『徽』五十一・二二七⑩〕

〔『徽』六十四・⑦〕

フダンぎ 「不_断着」

○小野田（をのだ）はそこへ脱（ぬぎ）つぱなしにしたお島（しま）の汗（あせ）ばんだ襦袢（じゅばん）や帶（お

び) が目 (め) に入 (はひ) つたり、**不斷着 (ふだんぎ)** を取出 (とりだ) すために引搔 (ひつかき) まはした押入 (おしいれ) のどさくさした様子 (やうす) などを見 (み) ると逆 (とて) も世帯 (しよたい) は持 (も) てない女 (をんな) だといつて、自分 (じぶん) のために離縁 (りえん) を勧 (すゝ) めた父親 (ち、おや) の辭 (ことば) が思出 (おもひだ) された。

○傍で母親は、包ばなか、ら、お銀の**不斷著**などを取出して見てゐた。

〔『徽』十四・六〇③〕

ただし、『徽』の中に一例だけ「平常」を「ふだん」とした特殊用例がある。次に示す。

○**平常 (ふだん)** のやうに赤子を抱いたり、臺所働きをしてゐるお銀の姿は、笠村の目にも傷 (いた) ましげに見えた。

〔『徽』五十四・一一四一⑪〕

その他の作品 (角川書店刊日本近代文学大系参照)

○**不斷** は全く何の考へもなしに、兄によりかゝつてゐる修三も、長兄としての氣の毒な運命を思ふと、そんなにまで犠牲を拂はせるといふことが、ひどく濟まないことのやうに思へた。

〔『無駄道』九・二九五⑬〕

○感覺にふれる總てのものが、何一つ**不斷** の状態におかれではゐなかつた。

〔『ファイヤ・ガン』三七〇⑯〕

○型にはまつた**不斷** の仕事とちがつて、色々な亂雜な事件や困難な問題が突然的に來るので、體の閑な割りに、

あわただしい氣分 (きぶん) の浪費が多かつた。

〔『ファイヤ・ガン』三七一⑪〕

○「こんな物が、**不斷**に そこの間に轉 (ころ) がつてゐた日には、それこそ大事件 (だいじけん) だからね。」

〔『ファイヤ・ガン』三七三⑪〕

○「それほど大事な姉なら、**不斷** 病氣の心配くらゐしてやれば可かつたぢやないか。」

「『過ぎゆく日』 四〇四(18)

○**不斷** その校長の人格に尊敬を拂つてゐた譯ではなかつたけれど、妻の讃められたことを聽くと、彼自身が讃められたよりも嬉しかつた。

〔『過ぎゆく日』 四〇七(17)〕

○ 医師は妻を失つた人のやうには見えないほど、**不斷** 以上にも氣輕るさうに見えたが、いくらか極惡さうにも見えた。

〔『過ぎゆく日』 四〇九(21)〕

谷崎潤一郎『小さな王国』（角川書店刊日本近代文学大系参照）

○ 貝島も**不斷** より力の籠つた辨舌で、流暢に語り續けて居ると、その時までひつそりとして居た教場の隅の方で、誰かがひそひそと無駄話をして居るのが、微かに貝島の耳に觸つた。

〔『小さな王国』 二五九(6)〕

○ 啓太郎は一番嫌疑を蒙り易い地位に居るので、**不斷** から氣を揉んで居たのだが、今夜圖らずも盜賊の汚名を着せられた口惜しさに、とうとう白状してしまつたのである。

〔『小さな王国』 二七九(7)〕

3 現代語の「ふだん」

里見弾『多情仏心』（新潮社文庫参照）

○ そうするとお宅の冷蔵庫は、**普断** は水がはいつてないのかしらと思つて・・・・・・ 〔後編五三八(2)〕

井上ひさし『吉里吉里人』（新潮社文庫参照）

この二例はただ用字が異なるだけでなくして、意味の違ひによつて使い分けていることが解る。「不断」は「不斷に」と副詞にて「絶え間なく」の意にとれるものである。「普段」の方は名詞で、「普通、日頃」の意にとれるも

のである。

○常に堂々どすて、外国のことば、嫌いな国ほど良ぐ勉強すて、良ぐ知り、外国が皆、涎ればタラタラて流す様な

普遍の文化と高い技術ば **不斷**（ふだん）に 創り出す。

【中第十一章一三四⑥】

○午後九時から同（どう）二分までに起こらなければならぬことを全部憶えているからたとえひとつでも とちがうところがあると、ゲジゲジ眉の間に深い皺（しわ）を何本も刻む。

【上第六章三四〇⑯】

○ **普段** の古橋であれば百米（メートル）も走れば顎（あご）を出してへたばつてしまふのだが、この夜はちがう。

【中第十三章二五九⑧】

表彰状の一文

晴れの表彰に対する文面には「絶え間なく続けた」練習への敬意とその結果勝ちえた栄光の座を讃えることばとして次の表現がある。このような晴れのことばとして「ふだん」は「不断」を選択していることも見逃せない事実であろう。

○ **不断** の練磨と輝く勝利の栄光に敬意を表します

「論文」資料その他

さらに加えて、「論文」資料などの表記にも「不断」は使用される傾向にあるようである。^{注9} そしてもう一つは「優柔不斷」と熟語化された場合もこの正表記が使われ、決して「優柔普段」などとしないことである。

次に平仮名書きの「ふだん」は特別な行事式典などのあつた翌日の新聞記事などに散見する。その他として吉田金彦氏はその著書『ことばのカルテ』（創拓社刊）の頭に「ふだん語小辞典」なる語を添えている。そして、「はし

がき」の中で日常語を「ふだん着の日本語」と表現しているが、「ふだん」の語についてはふれずじまいである。

現代の辞典類の中でもとりわけ小学生対象の国語辞典ではどのような現状であろうか。一三の辞典を参考にしてみると、次のような具合である。

チャレンジ小学国語辞典（秋山虔監修、福武書店「一九八五年一月」刊参照）

ふだん 「不断・普段」〔名〕①たえることなくつづくこと。〔例〕不断の努力が大切です。

②いつも。つね日ごろ。〔例〕普段着／普段からけがに気をつける。〔類〕普通（ふつう）。

最新小学国語辞典（倉沢栄吉・野元菊雄編、角川書店「昭和五十九年十二月」刊参照）

ふだん 「不断」①たえないでつづくこと。〔例文〕不斷の努力（どりょく）によつて成果（せいいか）があがつた。

②ぐずぐずしていて、きつぱりと決めないこと。にえきらないこと。〔例文〕優柔（ゆうじゅう）不断な男。

ふだん 「普段」いつも。平生（へいせい）。日ごろ。〔例文〕ふだんはすいているのに、きょうはいやにこんでいる。／ふだん着（ぎ）。

くもんの学習国語辞典（村石昭三監修、くもん出版「一九八八年一一月刊」参照）

ふだん 「不断」〔例文〕不断（ふだん）の研究（けんきゅう）の努力（どりょく）が実（み）を結（むす）ぶ。

〔意味〕絶（た）え間（ま）なくつづくこと。

ふだん 「普段」〔例文〕このあたりは、ふだんは静（しず）かな所（ところ）だ。〔意味〕いつも。

【参考】ふつう、かなで書（か）く。

同語複数表記で意味により書き分けがなされるとするもの、意味の異なりを重んじてそれを独立させて見出し語をたてたものとがあり、参考の部分に「不斷」から派生してきたことは触れられていないのが欠点であるが、実際の言語生活により近づこうとしている姿勢が見受けられるのである。そしてただ、現在の「普段」は概ね「ひらがな」で表記されるとしている点については如何なものであろうか。これを時代の先読み思考とみるべきなのか。この点については位相別によるサンプリング調査が待たれるのである。

ま と め

平安時代に読経の場面に登場した「ふだん」は鎌倉時代にはなりを沈め、姿を著しく潜めてしまうのだが、室町時代に再び世話のことばとして意味を換えて再登場し、広く使用されて行くことが判明した。そして江戸時代後期に至つて文字表記の上に膨らみがでてきて意読表記が加わり、明治時代になると「不斷」に「普段」といった義音の宛字が誕生し、さらに「平生」・「常時」・「平常」・「平素」・「常」などの意読表記が使用され、多分に賑わいを増したのだが、これには目もくれずに頑として「不断」を守り通した書き手もいたことが判明した。また一方大正時代に入つて意読表記は廃れはじめ「平生〈へいぜい〉」などは本来の読みとしてのみ使われ、「不斷」と同音で義音の「普段」だけが生き残つて今日に移行してきたのである。また、今後もっと詳細に見て行かねばならぬが、『新潮国語辞典』のあげる「普断」の表記^{注11}は一例も拾うことができなかつた。しかし、現代も「ふだん」は「不斷」・「普段」＝「ふだん」の三様表記がなされ、同義音「ふだん」の派生から独立へと進み、辞書の記載方法にも転換期を与えようとしている

のではなかろうか。とりわけ低学年向きの辞典に顕著であることはこの動向に一掃拍車がかかるのではなかろうか。

この二様表記はいずれも社会の場面、用途に応じて今後も使用されて行くことにならうことが裏付けられたのである。

注

1 引用文献についてはそのつど（）内に示すことにした。また、用例中のルビ表記も漢字の後に（）して示すことにした。引用例の所在は「」内に示すこととした。

2 『御堂関白記』は長徳四年（九九八）秋冬から寛仁四年（一〇一〇）春夏までの道長自筆の日記である。この中でとりわけ興味を引く寛弘三年五月十日の「不斷經」の部分を引用しておく。

○十日。辛亥。大内不斷御讀經初。丑時許廣業朝臣來云。爲式部丞定佐。面打破者。奇驚。見所上唇大腫。有疵間。案内文章生定輔云。闇打定佐。被打後打彼。事不具。廣業云々。内間通夜不閑云々。令奏御所邊濫由。廣業疵之由。又令奏可被召戒也。

3 「不斷煩惱得涅槃」は『大正大藏經』[四〇・八三六下]無量壽經優婆提舍願生偈註卷下に「即是不斷煩惱得涅槃分」と見える句である。本学教授近藤良一氏より御指導いただいた。

4 『日本國語大辭典』では、「不断」を古辞書『下學集』に収録していることになっているが、見出し語としてではなく、実際は「連綿（レンメン）」「疊字門」の注記として「不断（フダン）ノ義ナリ也」と収録されていることを指すようである。しかし、この論の上で見出し語収録の点から考察しているため、ここでは未採録とした。注記の意味は「連綿」に照してみると、「長く絶え間なく続く」意となる。

5 江戸時代の「ふだん」補遺

松葉軒東井編『たとへづくし』（宗政五十緒校天明八年写『たとへづくし——譬喻盡』）同朋舎刊参照

○不斷（ふだん）能（よい）形（なり）する人（ひと）に内証（ないしょ）能（よし）は無（な）し

6 仮名垣魯文の『牛店雜談安愚樂鍋』ではすべて「ふだん」（二例）「ふだんぎ」（二例）と平仮名表記である。

○そして「ふだん」のやうすといやア麻風呂敷（あさぶろしき）に茄子（なす）「ぎすぎすすること」でいふことが蜻蛉（とんぼ）にサの字（じ）「きざといふ義」だサ

○ **ふだん** ならふってぬいても一ぱんぐらいじやア客（きやく）のあたまの減（へ）る気（き）づけへハござりやせんが初日（しょに

ち）から三晩目（みばんめ）でござへすから爰（ここ）が要（かなめ）といふ処（とこ）でげス。 [三編上二二二ウ⑤]

○ なけりやア **ふたん着** の今までいいからちよろつとあひさつに出てこいの

○ **ふだんぎ** も見世ぎも、このうへ、これも馬みちか仲まちのふるぎやにて、おふくろがやすくかひをとしたる、 [三編下一オ④左]

7 志賀直哉自身、「普段」に落ち付くまでは「平常」の意読表記も行なつていたようである。

○ 「左うか——然しそれは其男が一人の **平常（ふだん）** の關係を餘り知らない所から、單純に左う思つたのではないカネ」

○ 「起きてからは、二人は **平常（ふだん）** と變らなかつたか？」

○ 勿論皆は一人の **平常（ふだん）** の不和は知てゐる、だから私は故殺と疑はれる事は仕方がない。

○ **平常（ふだん）** の不和は人々に推察はさすかも知ないが、それが證據となる事はあるまい。

〔夜の光『范の犯罪』一六六・⑪〕

○ 平常（ふだん）の大正二年の『范の犯罪』では「平常」で統一されていたのが、大正六年の『城の崎にて』『佐々木の場合』では「普段」を使用するようになり、同じ六年の『和解』では混用表記していて、志賀直哉自身の「ふだん」の用字「平常」から「普段」への落ち着きは、『暗夜行路』であつたのではなかろうか。

○ 然し **平常（ふだん）** 呼吸してゐる空氣とは餘りに違つた左う云ふ空氣の中に只ヂツとしてゐる内に不安と不快で自分はイライラして來た。

『和解』には「普段」の用例が一例みえ、この用例と合せて三例が見える。

8 森鷗外の同一語の異表記について全くないわけではないのである。この点について誤解が生じないためにも、「雁」における同一語異表記の問題について考察しておく。このことに関連する論文として山田俊雄氏の「同じ語の異なる表記について」（成城大学芸術学部創立三十五周年記念論文集一九八八）がある。

○ うそ 「嘘」 六六①一一四②一一五⑨／「謊」 一三一⑧⑩／一四七⑥

○ ざしき 「座敷」 五八⑦六三⑤一六三⑨／「座鋪」 五七③六一⑤六二二①

○ しゃぼん 「石鹼」 一箱一七⑤／「シャボン」 一二三七④⑤

〔夜の光『范の犯罪』一五一・⑫〕
〔夜の光『范の犯罪』一六一・⑫〕

〔夜の光『和解』三七九・④〕
〔夜の光『和解』三七九・④〕

○たばこ 「煙草」七四⑧八四①

「烟草」五九⑤⑩八六⑩九六④一一六①一一一②⑥一一四③一二八⑤一三〇③一四四③卷一入一四四⑤一盆一一一①一

屋一五⑤

○だんな 「檀那」五二④⑦六〇⑧七〇⑧七一⑦七三⑤八三③⑥八四②八五⑧一一四④⑨一一六⑩一一七⑧一七〇⑨一七五⑤二二一
⑨二三〇④⑦⑩一三三四⑤一四五⑤一顔一一四⑦一様一二三三⑤一四七①

「旦那」一六五⑦

○ちうちょ 「躊躇」六一②一一〇⑦一六六②／「躊躇」一五六⑧

○ところ 「所」三三一①六九④七〇③七八②③八三⑤九五②一一六⑧一二五⑤一二九⑩一三〇④⑩一三八②一三九①一五〇②一九〇
⑦一九一⑥一九五①一四八④一六六⑩一六九⑤一七一⑥一七六⑨一七九③一八一⑥置一九四①臺一一四九⑧

「處」九②一〇③三六⑥三七⑦四二⑦五四⑨七七③一七八⑥一八六⑦一八七⑨一一三⑦一六一⑥一七七⑧一八五④

○めがね 「眼鏡」二三一④一橋一八四⑩／「目金」二三三⑩二三四①②一橋九④金縁一一二八⑧

こうして見るに「だんな」「ちうちょ」がとりわけ気になる表記となろう。同表記の漢字が数例に及ぶのに対し、異表記の漢字が一回しか使用されない点からくるものである。同一作家の一作品中における統一表記の意識が何故乱れるのかこれは今後の課題にもなる。

9 論文資料

○それでは、**不斷**は呼び捨てをすることによってその緊密性のバロメーターになつてゐる遊女に対し、その馴染みの男が敬語表現を取ることは何を意味しているのであらうか。

〔近代語研究第八集阿部八郎氏「近松世話淨瑠璃の心話文」より〕

10 例外としては、「平生」を谷崎潤一郎は「ひごろ」と意読表記している。

○女達がすらりと眼の前に立んで、**平生**（ひごろ）憧れてゐたお座附の三昧線を引き出すと、彼は杯を手にしながら、感極まつて涙を眼に一杯溜めてゐました。〔明治四十四年九月「スバル」〕

11 「普断」という表記記載の例として、学研『漢字源』の「不」（一九）の「不（断）斷」の項目に「〔同〕普断・普段」と記載している。

12 関連論文として田島優氏の「意味分化に伴う表記の問題」（愛知県立大学文学部論集第三八号）があることをこの論を書き終えた時点で知ったことを付記しておく。

その他の参考文献資料

- 『三宝絵詞』（「三宝絵詞自立語索引」馬淵和夫監修中央大学国語研究会編、笠間索引叢刊八七）
- 『宇津保物語』（「宇津保物語本文と索引」宇津保物語研究会編、笠間書院）
- 『狹衣物語』（「古活字本狹衣物語総索引」榎原邦彦他共編、笠間索引叢刊）
- 『御堂関白記』（日本古典全集上下巻）
- 『今昔物語集』（「今昔物語集自立語索引」馬淵和夫監修有賀嘉寿子編、笠間索引叢刊）
- （「今昔物語集文節索引」馬淵和夫監修、笠間索引叢刊）
- 『宇治拾遺物語』（「宇治拾遺物語総索引」境田四郎監修、清文堂刊）
- 『平家物語』（「平家物語総索引」金田一春彦編、）
- 『曾我物語』（「曾我物語総索引」大野晋武藤宏子編、至文堂刊）
- 『蓮歩色葉集』（「元亀本蓮歩色葉集」京都大学国語研究室編、臨川書店刊）
- 『文明本節用集』（「文明本節用集」影印索引、中田祝夫編、風間書房刊）
- 『弘治二年本節用集』（「印度本節用集」影印索引、中田祝夫編、風間書房刊）
- 『永祿五年本節用集』（京都大学国語研究室編、臨川書店刊）

『経享本節用集』（京都大学国語研究室編、臨川書店刊）

『饅頭屋本節用集』（「五本対照節用集」亀井孝編、勉誠社刊）

『易林本節用集』（「五本対照節用集」亀井孝編、勉誠社刊）

『塵芥』（京都大学国語研究室編、臨川書店刊）

七巻本『世俗字類抄』（古辞書叢刊、雄松堂）

十巻本『伊路波字類抄』（古辞書叢刊、雄松堂）

『初辭通韻』（古辞書叢刊、雄松堂）

『下学集』（古抄本下学集）影印索引、中田祝夫編、風間書房刊）

『黒本本節用集』（五本対照節用集）亀井孝編、勉誠社刊）

『和漢通用集』（印度本節用集）影印索引、中田祝夫編、風間書房刊）

『天正本節用集』（五本対照節用集）亀井孝編、勉誠社刊）

『伊京集』（五本対照節用集）亀井孝編、勉誠社刊）

『明応五年版節用集』（五本対照節用集）亀井孝編、勉誠社刊）

二巻本『世俗字類抄』（東京大学国語研究室資料叢書、汲古書院刊）

『こんてむつすん地』（「こんてむつすん地総索引」近藤政美編、笠間索引叢刊）